HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語沙流方言における動詞の助動詞用法と制約
Author(s)	岸本, 宜久
Citation	北方人文研究, 9, 17-38
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/61288
Type	bulletin (article)
File Information	09_02_kishimoto.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ語沙流方言における動詞の助動詞用法と制約[1]

岸本宜久
北海道大学大学院文学研究科博士課程

1. はじめに

アイヌ語の述語構造には、二つの動詞的形式（以下、前部を V1、後部を V2 と表わす）が意味上で複合してひとまとまりの述語としてふるまう、いわゆる複雑述語（complex predicate）の構造が存在する。

（1） orwano a-φ-e ayne **a-φ-okere** ruwe ne.
そして 1S.SG-3O-食べる 挙句 1S.SG-3O-終える の だ
「そして私が（美味な魚を）食べに食べたあげく、私は（食べることを）終えたのだ」
久保寺（1977：193）

（2） tane menokopo φ-suke wa **ipe-an okere** kor
今 娘 3S.SG-炊事する て 食べる-1S.PL 終える と
ora ka aynu φ-arki yak pirka
それから 人 3S.-来る なら 良い
「今、娘さんが炊事をしていて、私たちが食べおえてから人が来るのが良い」
田村（1989：50）

（1）は他動詞 okere「終える」が単独で述語として用いられており、文脈に合わせて人称変化している。一方（2）で現れる okere は「終える」という意味を有しながらも ipe-an「（私たちが）食べる」という自動詞に後続して意味上で複合し、また動詞であれば要求されるべき人称変化もみられない。このような V2 に立つ動詞的形式を本稿では助動詞と呼ぶ。形態統語上 V1 と助動詞 V2 は同等のステイタスではないために典型的な動詞連続構造（serial verb construction）とは異なるが、（2）のような動詞から転成した助動詞は、動詞としての意味を保ったまま V1 と意味上で複合することから動詞連続構造と非常に近い構造を示す[2]。

本稿では、アイヌ語沙流方言のテキスト資料から当該の助動詞を含む複雑述語（以下、助動詞構文）を分析し、動詞連続構造の概念および類型のなかで位置づけることで、動詞から転成された助動詞の統語的・意味的な特徴を明らかにする。そのうえで、助動詞

1 本研究は日本学術振興会科学研究費（特別研究員奨励費、課題名「アイヌ語の補助動詞に関する記述言語学的研究」、課題番号 14J04824、研究代表者岸本宜久）の助成を受けたものである。

2 本来の動詞としての意味を保つ形式を助動詞と呼ぶことは言語学で一般的ではなく、一種の軽動詞（light verb）とみなすのが良いかもしれないが、本稿では先行研究とあわせて（2）のような V2 を助動詞と呼ぶ。また、動詞から転成した助動詞（VAux(<vt)）の構文および自動詞から転成した名詞を項にとる他動詞（N(<vi)V）の述語構文が SVC と非常に近い構造であることは、中川（2013）がすでに指摘し、援用している。

形式の自他の間にみられる制約（自動詞からの転成が非常に制約的）が項の共有の有無に関わっていることを指摘し、制約差の理由および制約下で許容される形式の特徴について説明付けを試みる。

2.　先行研究

アイヌ語の助動詞についての記述を概観し、本稿で分析・考察の対象とする形式の統語的、意味的な性質を確認する。

2.1.　助動詞についての記述

金田一（1931a : 161-168）はアイヌ語の動詞について記述するなかで「態の助辭」（目次では「動作態の助動詞」）という項目を設け、アスペクトに関わる形式として 11 形式をあげている[3]。このうちの 9 形式が助動詞であり、それぞれ用例を示しながら分析・考察をおこなっている。また、「願望形」や「想像形」といった文形式についての記述においても助動詞の形式がみられる（金田一 1931a : 181-182）。助詞ないし助動詞についての体系的な記述はみられないが、アスペクトやモダリティを表わす形式として助動詞の一部を取り上げて記述している点は、以下で展開する助動詞記述の嚆矢といえる。

知里（1942 : 151-154）は金田一（1931a）で示された助詞を全般的に再考するうえで、より体系的な記述をおこなうために「(イ) 如何なる語に附くか（または附かないか)、(ロ) 如何なる文節をつくるか―（続く文節であるか云い切りの文節であるか)」（知里 1953 : 920）[4]という基準で助詞を 7 種に分類している。このうち助動詞は「すべて用詞にのみ附く。そこで文を終止することもあり、また次へ續いて行くこともある。」[5]（知里 1942 : 152）という統語的な特徴から「第一種の助詞（法及び態の助詞)」として分類され、25 形式があげられている[6]。また、機能についても「述語として用ひられた用詞を助けて、それに、可能、推量、願望、斷定等主觀的な意味を添へるものが多い。中には態を表はすものもある」（知里 1942 : 152）と記述しており、基本的に V1 に対してモダリティ、アスペクトといった文法的意味を付加すると述べている。知里は、助詞の体系における助動詞の統語上、機能上の基本的な特徴を明らかにしたうえで、さらに助動詞を形式的、意味的な特徴から以下の 3 種に分類している。

まず、第一種の助詞（すなわち助動詞）は助動詞としてのみ用いられる primary postpositions（本来的な後置詞）の形式と、共時的に動詞としても用いられる secondary postpositions（他の品詞から派生的に生じた後置詞）の形式に分けられ、さらに後者は「用詞としての意味と、助詞としての意味とを異にしてゐる」形式と「用詞として用ひ

---

[3] 単複、方言上のバリアントをひとつにまとめると、a/rok、aan、oasi/heasi、anke/anki、etokoyki、etokus、nisa、okere、ranke の助動詞形式と、接続助詞 kor、また助詞ではないが「接続助詞+V2」で補助動詞構文を形成する wa isam の 11 形式があげられている。なお、「願望形」では rusuy、「想像形」では nankor といったモダリティに関わる助動詞が挙げられている。

[4] 知里（1942）では助詞の分類基準が明示されていないが、同じくアイヌ語の助詞を分類して論じた知里（1953）には引用のとおりの基準が示されており、知里（1942）での分類基準と一致すると考えられる。

[5] 用詞については「動詞と形容詞とを併せて用詞と稱する」（知里 1942 : 77）と定義されている。

[6] 単複、方言上のバリアントをひとつにまとめると 19 形式ほどになるが、本来的な助動詞として a/rok、aan、nankor、manu、nisa、rusuy 等、形式は動詞的だが意味は機能語的な助動詞として okay、rayke、ranke 等、形式も意味も動詞的な助動詞として eaykap、easkay、ki 等があげられている。

られる場合と助詞として用ひられる場合とで、意味に大差の無い」形式の二つにわけられると指摘している（知里 1942：152)。すなわち、形式上も意味上も動詞的ではない助動詞、形式上は動詞的だが意味上は機能語的な助動詞、形式上も意味上も動詞的な助動詞の 3 種があることを明らかにしている。助動詞が形式上、意味上で差異を有するという指摘は知里の卓見であるが、助詞全般を扱うなかでの指摘であるため助動詞内部の分類についての詳しい記述はみられない。

田村（1960）[7]は、V2 の位置に立って人称標示を取らない要素を助動詞として定義したうえで、知里（1942）の助動詞の分類でいうところの、形式上も意味上も動詞的ではない助動詞と形式上は動詞的だが意味上は機能語的な助動詞を「(狭義の）助動詞」(V1 の後ろの位置に立って決して人称変化することがない要素)、形式上も意味上も動詞的な助動詞を「動詞の助動詞的用法（助動詞的に使われた動詞)」(V1 の後ろの位置に立って、時として本動詞にも助動詞にもなる要素）として分類して記述している。

「(狭義の）助動詞」と「動詞の助動詞的用法」の間に見られる統語的なふるまいの異なりについて、田村（1960）は以下の例をあげて指摘している。

(3)　ku-mokor　ka　**ki**　**rusuy**.
　　1S.SG-眠る　も　する　たい
　　「私は眠ることもしたい」

田村（1960：76）

(4)　ku-mokor　ka　**eaykap**.
　　1S.SG-眠る　も　でいない
　　「私は眠ることもできない」

田村（1960：76）

(3）は狭義の「(狭義の）助動詞」、(4）は「助動詞的に使われた動詞」の例である（下線部)。V1 と助動詞の間には副助詞が立つことができ、(3）と（4）はいずれも副助詞 ka「〜も」が V1 の直後に立っている。このとき「(狭義の）助動詞」は副助詞に直接接続できず ki「する」という代動詞的な形式を立てる必要があるが、「助動詞的に使われた動詞」はこれが不要で副助詞に直接接続できる（田村 1960：76)。このことから、「助動詞的に使われた動詞」は統語的により動詞的な性格を保っていると考えられる。また田村は「助動詞的に使われた動詞」が、以下のように同じ位置（V1 の後ろ）で自立した動詞（本動詞）としても現れうる点で「(狭義の）助動詞」と異なることを指摘している。田村（1960）での記述をもとに eaykap「(能力的に）できない、下手だ」を例として以下に示す。

[7] 田村（1960）は、同氏の旧姓である福田で発表されている。参考文献欄では旧姓を併記したが、本文での引用に際しては田村（1960）として示す。

（5） ku-se ka **<u>eaykap</u>**.
1S.SG-背負う も できない
「私が背負うこともできない」

田村（1960：77）

（6） kani anak kemeyki earkinne **<u>k-eaykap</u>**.
私 は 裁縫する とても 1S.SG-できない
「私は裁縫がとても下手だ」

田村（1960：77）

（5）は、V1 の se「背負う（他動詞）」が 1 人称単数主格の人称接辞 ku-をとっているのに対し、V2 の位置にある eaykap「できない（他動詞）」には人称標示がなく不変化詞となっていることから、V2 は助動詞用法といえる（本動詞であれば人称標示が義務的であるため）。一方（6）は、V1 の kemeyki「裁縫する（自動詞）」が名詞に転成され不変化詞となり[8]、副詞 earkinne を挟んで V2 の位置にある eaykap が 1 人称単数主格の人称接辞 k-（ku-の異形態）をとっていることから、V2 は本動詞といえる（形式上は動詞と動詞が並んでいるように見えるが、目的語の名詞項と他動詞という関係である）[9]。また、意味上でも「助動詞的に使われた動詞」は本動詞の意味があまり漂白されておらず動詞的な意味が保たれている[10]。さらに、田村（1960：76）は「動詞は助動詞的に使われた場合でもふつうそれ自身のアクセント素を持つ」と指摘しており、音韻的にも独立性が高い。

本稿ではこの「助動詞的に使われた動詞」が意味上で動詞として本動詞に複合し単一の述語を形成する点に着目し、述部での動詞的要素の連続における V1 と V2 の複合上の制約について動詞連続構造の概念をもちいて説明を試みる[11]。以下では「V1+助動詞的に使われた動詞 V2」（以後、「V1+V2aux.」と略する）の助動詞構文を分析・考察の対象とする。また、以下で単に「助動詞」として呼び表わすものは「助動詞的に使われた動詞」のみをさし、田村（1960）の「（狭義の）助動詞」は含まない。

---

[8] 知里（1936 : 46-47）はアイヌ語の自動詞（他動詞の名詞抱合や接辞によって派生された 1 項動詞も含め）がそのままの形式で名詞に転成できることを記述しており、kemeyki「裁縫する（自動詞）」もこれに該当して eaykap「できない（他動詞）」の目的語となっていると考えられる。

[9] 狭義の「助動詞」にも動詞に由来すると考えられる形式が存在する。例えば完了を表わす助動詞 a は共時的に存在する動詞 a「座る（自動詞）」と語源的に関係があると考えられるが（田村 1960：72）、副助詞を挟む場合は代動詞的な ki を要し、意味も本動詞「座る」の意味が漂白されて専ら完了のアスペクトとして V1 に機能している点で「助動詞的に使われた動詞」とは異なる。

[10] 次節 2.2.では当該の形式の本動詞としての意味をあげている。これと 3.2.の表 1 にあげた助動詞用法としての意味を照らし合わせると、助動詞用法が非常に動詞的な意味を保っていることがわかる。

[11] アイヌ語の助動詞構文を検討するうえで動詞連続構文の枠組みが有用である点については指導教員である佐藤知己先生より多くのご指摘・ご指導を賜った。以下で示す通り、SVC の類型的な記述が助動詞構文の示す傾向に一致する点が多く非常に重要な観点であり、今後の課題も含め助動詞構文のテーマを展開する大きなきっかけとなった。ご指導に深く感謝申し上げるとともに、ご指摘を展開できるよう今後も研究を続けていきたい。

2.2.　アイヌ語沙流方言の助動詞

田村（1960：76-77）は、「V1+V2aux.」の後部要素として okere「終る」、eaykap「（能力的に）できない」など 18 形式をあげてそれぞれ動詞としての用法と動詞の助動詞用法での用例をあげている（詳しくは 3.2.の表 1 で示す）。

佐藤（2008：78-93）は千歳方言の助動詞形式について用例を上げながら記述しているなかで、共時的に動詞として用いられる形式の助動詞用法として田村（1960）とも重複する ki、kopan、koyaykus、niwkes、okere に加え、esinki「飽きる」（他動詞）、emonasap「忙しい」（他動詞）、etoranne「気力がない」（他動詞）、nukuri「おっくうである」（他動詞）をあげており、いずれも沙流方言においては動詞の助動詞用法が認められる[12]。

どのような動詞が助動詞用法を持つかを網羅的に述べることは難しいが、否定的な意味を持つ動詞が助動詞用法を持つ傾向があるという佐藤（2008：90）の指摘どおり、V2aux.に立つ形式は否定的な意味を持つ動詞が多く、一部はその対となる意味（eramiskar「わからない」に対して eraman「わかる」、moyre「おそい」に対して tunas「はやい」など）を持つ動詞が助動詞用法を有するといった傾向がみられる。

次節以降は、田村（1960：76-77）の記述であげられた助動詞を中心に沙流方言のテキストのなかで現れる形式の分析、分布の確認をおこなう。

3.　分析

公刊されている沙流方言のテキスト資料を用いて、田村（1960：76-77）であげられている助動詞ならびに同形の動詞の用例の分析を行った。以下で示す資料は筆者が電子テキストにしたうえで全文検索が可能な状態にし、資料の範囲内ではおおよそ網羅的に用例を採取した。

3.1.　資料について

本稿の用例分析に用いた資料は金田一（1931b）、久保寺（1977）、萱野（1998）、萱野（2005）、田村（1984-1989）である。以下、それぞれの資料の特徴を簡略的に示す[13]。

金田一（1931b）「アイヌユーカラ虎杖丸の曲」

[採録年代]　1931 年採録

[内容構成]　韻文形式の口承文芸である英雄叙事詩（yukar）1 編。沙流川筋の紫雲古津の鍋沢ワカルパ氏から採録したもので、音声資料はない。

[資料体裁]　アイヌ語はおおよそ 4〜6 音節ほどの切れ目ごとに改行され,日本語の対訳がこれに並行して 1 行をなし 7035 行、約 370 ページにわたる。アイヌ語はヘボン式のローマ字で記されており、ほぼすべてのページに詳しい脚注がつけられている。

12　田村(1996)の辞書記述において、それぞれの項目で動詞の助動詞用法としての記述や用例がみられる。

13　本稿では各テキストからの引用に際して服部（1964：34）の音素表記に倣って筆者が統一的に書き改めている（声門閉鎖音/'/[ʔ]は基本的に表記を省略した）。またグロスと日本語訳は筆者の手によるため、誤りは全て筆者に帰するものである。

久保寺（1977）「アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究」

[採録年代]　1929 年～1950 年（主に 1932 年、1936 年の採録が 8 割を占める）

[内容構成]　韻文形式の口承文芸である神謡（kamui-yukar）106 編と聖伝（oina）17 編の計 123 編で構成されるが、このうち 116 編が沙流川流域で採録された「沙流川筋所伝」のテキストである。本稿ではこの 116 編を対象とする。なお、偏りはあるが 5 人の伝承者によって語られている。音声資料はない。

[資料体裁]　アイヌ語はおおよそ 4～6 音節ほどの切れ目ごとに改行され、日本語の対訳がこれに並行して 1 行をなして 116 編通して約 32500 行、約 520 ページのテキストである。なお、アイヌ語はヘボン式のローマ字で記されている。

萱野（1998）「萱野茂のアイヌ神話集成」

[採録年代]　1961 年～1975 年（主に 1960 年代に採録されたもの）

[内容構成]　韻文形式の口承文芸である神謡（kamuy yukar）23 編、英雄叙事詩（yukar）4 編、散文形式の口承文芸である説話（uwepeker）13 編で構成され、いずれも沙流川流域で採録されたテキストである。なお、偏りはあるが 15 人の伝承者によって語られている。

[資料体裁]　左頁にアイヌ語がローマ字とカタカナで示され、右頁に日本語訳が示されている見開きの形式で約 2000 ページであり、各ジャンルの全体に占める比率は、神謡が約 23%、英雄叙事詩が約 27%、説話が約 50%である。全テキストに対応する付属の音声資料（CD）の総収録時間は約 11 時間である。テキストは 9 巻に渡るが、本稿では引用した巻のみを参照文献に欄に示す。

萱野（2005）「ウウェペケレ集大成」

[採録年代]　1961 年～1968 年

[内容構成]　散文形式の口承文芸である説話（uwepeker）11 編で構成され、いずれも沙流川流域で採録されたテキストである。なお、1、2 編ずつ 7 人の伝承者によって語られている。

[資料体裁]　1 ページの左半分がカタカナで書かれたアイヌ語のテキストであり、アイヌ語の下には日本語の逐語訳が付けられている。また、右半分は日本語訳であるが対訳的ではない。この形式で約 200 ページあり、全テキストに対応する付属の音声資料の総収録時間（CD）は約 2 時間である。

田村（1984-1989）「アイヌ語音声資料」

[採録年代]　1955 年～1969 年

[内容構成]　沙流川流域の語り手による散文形式の口承文芸（uwepeker、upaskuma）が 28 編、韻文形式の神謡が 3 編、その他、歌謡や自然談話など 40 編の合わせてテキストの長短、ジャンルがさまざまな 71 編が示されている。偏りはあるが 15 人の伝承者によって語られ、謡われている。

[資料体裁]　見開きで左頁にローマ字のみのアイヌ語テキスト、右頁に日本語訳が示されている形式で、約 400 ページある。全テキストに対応する付属の音声資料の総収録時間は約 9 時間である。テキストは 6 巻に渡るが、本稿では引用した巻のみを参照文献に欄に示す。

3.2.　助動詞の用例と分布

田村（1960：76-77）であげられている助動詞を対象に、沙流方言のテキスト資料にみられる用例を分析した。すでに先行研究において記述されていることではあるが、以下で用例をあげて沙流方言にみられる V1 も V2 も意味的に動詞である助動詞構文について概観する。

動詞の助動詞用法について 1.で示した（2）は自動詞である V1 の後ろに他動詞 okere「終える」が立って助動詞としてふるまっている例であるが、V1 には（7）のように他動詞も立つ。

（7）　tane　yukar　　opitta　**ku-ϕ-ye　　okere**　　kus
　　今　英雄叙事詩 全て　1S.SG-3O-言う　終える　ので
「いまはもう英雄叙事詩をみんな謡いおえたので」
田村（1987：74）

さらに、V2 には自動詞から転成した助動詞もある。

（8）　**iwak-an　moyre**　　kor　i-etoko　　ta　iwak-an　　pakno　ϕ-an　　wa
　　帰る-1S.PL おそい　と　1O.PL-の先　に 帰る-1S.PL　まで　3S.SG-いる　て
「私たちが帰るのが遅いと（伯父さんは）私たちの帰る先に私たちが帰るまでいて」
萱野（1998c：92）

（8）の V2 に立つ moyre は単独で用いる場合は「おそい、遅れる」という自動詞である[14]。

田村（1960：352-353）は動詞の助動詞用法（動詞が助動詞に転成された形式）として以下の 17 形式を記述している[15]。表 1 では「V1+V2aux.」の V2aux.が自動詞である場合と他動詞である場合とに分け、それぞれ V1 に立つ動詞の自他の分布を沙流方言のテキストで確認した。V1 および V2 がともに 3 人称の場合、複合動詞や目的語+他動詞の形式と区別がつかないが、助動詞構文の可能性を有することから本稿では用例に含めて分析している。これらの区別と扱いについては今後の課題である。表中の「総出現数」

---

14 アイヌ語において形容詞的な意味の語と自動詞のふるまいが意味的、形態的、統語的に非常に一致していることから（知里 1942：77-78）、日本語で形容詞に分類される語は、アイヌ語では形容詞という品詞を立てずに広く自動詞として扱われている。そのため、moyre は「おそい」という形容詞的な意味にも「遅れる」という自動詞的な意味にも訳すことができる。本稿では訳語を統一するため、本文で示す際は形容詞的な意味のみを示す。

15 他動詞 ki「する」も助動詞用法を有するが、軽動詞として他の形式よりも統語的に特異なふるまいするため本稿では分析の対象外とした。

とはテキスト資料における表最左列の形式の総出現数であり、動詞・助動詞の用法を区別せずに数え上げている。括弧内は異なり語数を示す。

表 1 助動詞構文の自他分布

	総出現数	V1+V2aux.	助動詞構文		
			V1=Vi	V1=Vt	V2
tunas	48	V1+tunas 「V1 するのがはやい」	3(3)	0	Vi
moyre	58	V1+moyre 「V1 するのがおそい」	6(4)	2(2)	
okere	72	V1+okere 「V1 し終える」	15(7)	12(7)	Vt
niwkes	27	V1+niwkes 「V1 し残す」	9(3)	5(3)	
oyra	32	V1+oyra 「V1 し忘れる」	0	6(4)	
easkay	68	V1+easkay 「V1 ができる」	24(16)	16(8)	
eaykap	122	V1+eaykap 「V1 ができない」	47(30)	42(20)	
eraman	75	V1+eraman 「V1 がわかっている」	0	1	
erampewtek	83	V1+erampewtek「V1 がわからない」	1	1	
amkir	13	V1+amkir 「V1 に覚えがある」	2(2)	1	
eramiskari	121	V1+eramiskari 「V1 を見知らない」	8(6)	22(5)	
koyaykus	3	V1+koyaykus 「V1 ができない」	1	2(2)	
eoripak	24	V1+eoripak 「V1 に恐縮する」	1	1	
etoranne	20	V1+etoranne 「V1 を面倒に思う」	4(4)	2(2)	
kopan	27	V1+kopan 「V1 を嫌う」	8(4)	1	
sitoma	50	V1+sitoma 「V1 を恐れる」	3(2)	2(2)	
eykesuy	2	V1+eykesuy「V1 を嫌がってしない」	2(2)	0	

田村（1973：76）は「助動詞は、自・他を問わず動詞句のうしろについて動詞句を形成するものである」と指摘しており、表 1 においても「V1+V2aux.」の前部要素と後部要素の自他の組み合わせにおいて基本的に「自動詞+自動詞」、「他動詞+自動詞」、「自動詞+他動詞」、「他動詞+他動詞」のすべての組み合わせが確認できた。

V2aux.に立つ形式は動詞からの転成形式であり、どのような動詞が助動詞用法をもつのかを網羅的に捕捉することは難しいが、この種の助動詞についての記述を見る限りは自動詞から転成した助動詞は他動詞から転成した助動詞に比べて圧倒的に限られているといえる。なお、田村（1960：77）であげられている自動詞 tunas「はやい」、moyre「おそい」の助動詞用法は、Refsing（1986：200）の静内方言の記述においてもみられる[16]。

16 静内方言について語彙と用例を示している奥田（1999）は、tunas「はやい」の記述において自動詞、副詞、助動詞の用法を記載しているが、moyre「おそい」の記述においては自動詞の用法のみを記載して

自動詞の助動詞用法の記述としては他に ruy「激しい」（田村 1996：596）がみられるが、これ以外には沙流方言を中心に管見の及ぶ限り記述がみられないことから、他動詞の助動詞用法に比べると限られているといえる。ruy については 6.2.で述べる。

V1 と V2aux.に立つ動詞形式は先述のとおり自他いずれの形式もあり、基本的にすべての組み合わせが可能である。しかし先行研究での記述においても、またそれぞれの用例数（テキスト内容によって出現に偏りはあるが）においても V2 に立つ形式は他動詞から転成した助動詞が圧倒的に多く、自動詞から転成した助動詞は非常に限られている。V2aux.に見られる自他の偏りについて自動詞からの転成に何らかの制約があると仮定すると、次の点で一考を要する。一点は自動詞から助動詞への転成において制約が生じる理由、もう一点は助動詞への転成に制約があるなかで tunas、moyre の形式が許容される理由である。本稿ではこれら説明付けとして、以下で示す動詞連続構造の概念からアプローチしていく。

4.　動詞連続構造とアイヌ語の助動詞構文

動詞連続構造（Serial Verb Construction、略して SVC）とは、Aikhenvald（2006：1）で以下のように定義される述語構造のことである。

> A serial verb construction (SVC) is a sequence of verbs which act together as a single predicate, without any overt marker of coordination, subordination, or syntactic dependency of any other sort.

すなわち、SVC とは複数の動詞が連続して単一の述語としてふるまう構文で、かつ連続している動詞間の等位的、従位的ないしその他の統語的な依存関係を示すマーカーがない述語構造のことである。アイヌ語は基本的に動詞を中心とした句や節が直接連続して統語的な関係を持つことはなく、それぞれに等位的、従位的な関係がある場合は接続助詞で結ばれていく。また上述の助動詞構文であっても、本動詞である V1 に対して V2 は不変化詞として形態的に動詞性（動詞に義務的な人称変化）を失い助動詞となることから厳密には SVC を有しないといえる。

しかし、動詞の助動詞用法として V2aux.に立つ形式は、2.1.で示したとおり本来の動詞としての意味を保っており、また V1 と V2 の間の統語的な依存関係を表わすマーカーもなく、さらに V1 と V2 は意味上で複合して一つの事象を表わす単一の述語としてふるまうことから「V1+V2aux.」は SVC に非常に類似した構造であるといえる。このことから、助動詞構文における V1 と V2 の関係を考察するうえで SVC の概念からアプローチすることは重要な手がかりとなりえる。統語的、形態的、意味的な特徴を次で確認していく。

いる。また千歳方言の辞書である中川（1995）は tunas「はやい」の項目で自動詞と副詞の用法を記述する一方、moyre「おそい」の項目では自動詞と助動詞の用法を記述しており、方言ないし分析資料によって tunas と moyre の助動詞用法の認定に偏りがみられることもある。

4.1. SVCの構成上の特徴と助動詞構文

Aikhenvald（2006：3-4）は SVC を類型的に記述するうえで 4 つのパラメータに着目している。以下に要約して示す。

一つ目は動詞の構成（composition）について、対称的（symmetrical）か非対称的（asymmetrical）かという基準を立てている。対称的というのは、たとえば二つの動詞が連続しているときに、いずれの動詞も意味的、文法的に制約のないクラスから選択されている SVC の構成であり、一方、非対称的というのは二つの動詞が連続しているときに意味的、文法的に制約のあるクラスとないクラスからそれぞれ動詞が選ばれている SVC の構成である。なお、制約のないクラスから選ばれた動詞は"major verb"と呼ばれ、制約のあるクラスから選ばれた動詞は"minor verb"と呼ばれる（Aikhenvald, 2006：22）。この区分を以下 A と称する。

二つ目は動詞の隣接性（contiguity）という統語的な位置関係に基準を立て、連続する動詞が隣り合う形式であるのか、それとも動詞と動詞の間に他の要素が割って入る非隣接の形式であるのかによって分けている。この区分を以下 B と称する。

三つ目は SVC の構成素の語としての性質（wordhood of components）について、連続する動詞の形態的、音韻的な緊密性に基準を立て、SVC を構成する動詞がそれぞれ語として文法的、音韻的なまとまりをもっているかいなかによって分けている。この区分を以下 C と称する。

四つ目は SVC の文法範疇の標示（marking of grammatical categories in SVC）について、動詞に標示される主格、目的格の人称や時制、アスペクト、モダリティや否定要素などが SVC の構造全体に対して一つだけマークされる形式（single marking）であるのか、あるいは SVC を構成するすべての要素がマークされる形式（concordant marking）であるのかによって分けている。この区分を以下 D と称する。

これら A から D のパラメータによって連続する動詞の間の統語的、形態的、意味的な関係および性質に多様性が生まれ、SVC を類型的に記述するうえでの基礎となっている。以下ではこれをアイヌ語の助動詞構文「V1+V2aux.」に当てはめて考えていく。

まず A について、表 1 で示したとおり V2 に立って助動詞としてふるまう動詞は自他ともに限られており、ある程度意味的な制約および文法的な制約が存在すると考えられる。一方、V1 に立つ動詞は V2 とのパラディグマティックな関係において制約はあるが、V2 に比べて立ちうる語の選択範囲が常に広い。このことからアイヌ語の助動詞構文における V1 と V2 の関係は非対称的であるといえる。次に B についてであるが、構文上、基本的に V1 と V2aux.は隣接して意味的にひとまとまりとなっているいえるが、副助詞は V1 と V2 の間に割って入ることができるため形態的な緊密性は高くない。C についても、副助詞の挿入が可能であることから V1 と V2 の間に複合のような形態的に高い緊密性は認められない。また、2.1.で示したとおり、V1+V2aux.は音韻的なまとまりも認められない。最後の D については V2 が不変化詞である点および常に V1 の結合価に従って標示されていることから、形式上は V1 のとる標示が V2 を含む構造全体の文法範疇の標示を担っている（single marking）ようにみえ、V1 と V2 で単一の節を構成するようにふるまっている。ただし、B、C、D のような形式面の特徴は、SVC と助動詞構文で構造が異なるため単純にはあてはめることはできない。

Aikhenvald（2006：12）は V1 と V2 の間の文法範疇に関わる特徴として"Sharing Argument in SVC"（動詞連続構造における項の共有）をあげて、"Prototypical serial verb constructions share at least one argument."（典型的な動詞連続構造は少なくとも一つの項を共有する）と指摘している。また、Dixon（2010：406）も"The general rule is that all verbs in an SVC should have the same subject."（一般的な規則として一つの動詞連続構造のなかのすべての動詞は同じ主語をとる）として、連続する動詞の間では特に主語の名詞項の共有が一般的であることを指摘している[17]。

アイヌ語は動詞に標示される文法範疇のうち特に人称標示が義務的であり、主格および目的格によって厳密に動詞が屈折するため、人称と照応する名詞項も文脈などからある程度はっきり見いだせる。V2aux.は形式的に不変化詞であっても意味上は動詞的にふるまうことから、形式の自他に応じて要求される名詞項が想定される。助動詞構文において意味上の V1 と V2 がそれぞれ要求する名詞項の共有関係についてみていく。

（9）a-uni　un　ka　**hosipi-an　ka　eaykap**　pe　ne kusu
1.SG-家　へ　も　帰る-1S.SG も できない もの　だ から
「私の家へも私は帰ることもできないものだから」
田村（1985：10）

（10）inan　macihi　eun　pokor　hawe　ne　ya　ka　**ku-ϕ-nu　oyra**　korka
どっち　妻　に　子がいる　話　である　か　も　1S.SG-3.O-聞く　忘れる　けれど
「（長兄は本妻と妾と）どっちの妻に子がいたのか私は聞き忘れたが」
萱野（1998b：25）

（9）は V1 が自動詞で V2 が他動詞、（10）は V1 も V2 も他動詞の組み合わせである。（9）の V1 の自動詞 hosipi「帰る」は 1 人称単数主格の人称接辞-an をとっており、主語の名詞項にあたる「私」と照応していることがわかる。一方、人称標示はないが V2 の他動詞 eaykap「できない」が要求する名詞項を意味上から想定すると、主語は「私」であり、目的語は「帰ること」という V1 の動作内容を補文的にとっていると考えられる。（10）についても V1 の他動詞 nu「聞く」は 1 人称単数主格の人称接辞 ku-と 3 人称目的格の人称接辞ϕ（ゼロ形態）をとっており、主語の名詞項にあたる「私」と目的語の名詞項にあたる「話」にそれぞれ照応している。一方、V2 の他動詞 oyra「忘れる」で想定される主語も「私」であり、目的格は「聞くこと」という V1 の動作内容を補文的にとることによって V1 と意味上で複合していると考えられる。また、V1 が自動詞の場合に限られるが、以下の点からも主語が共有されていることが確認できる。

（11）e-cis　etori　a-oypepi　ϕ-ϕ-o　**ipe-an　ka　eaykap**
2S.SG-泣く　鼻汁　1S.SG-茶碗　3S-3O-入る　食べる-1S.SG　も　できない

[17] SVC ではないが、日本語の複合動詞においても前部要素と後部要素の間に「主語（卓立項）一致の原則」があると指摘されており（松本 1998）、動詞の複合における重要な特徴であるといえる（ただし、Aikhenvald（2006）、Dixson（2010）でも指摘されているとおり、項の一致は SVC にとって絶対的な条件ではない。）

e-eirpakno **ipe pokayki a-φ-eaykap** ki na
2S-一緒に 食べる も 1S.SG-3O-できない ぞ
「お前の泣く鼻汁が私の茶碗に入って私は食事することもできない、お前と一緒に食事することも私はできないよ」

萱野（1998a：22）

（11）は「ipe-an ka eaykap」という助動詞構文と「ipe pokayki a-eaykap」という他動詞述語文によって「私は食事することもできない」という文脈上同じ意味の内容が表わされている。副助詞 ka と pokayki は文体的な形式の差であり機能は変わらない。助動詞構文では V1 が本動詞として 1 人称単数主格の人称標示をとっているが、他動詞述語文では V1 の ipe が名詞に転成され、V2 の位置にある eaykap が本動詞として人称をとっている。このとき V2 は 1 人称単数主格の人称標示をうけ、3 人称目的格は V1 の転成名詞 ipe「食事（< 食べること）」と照応していることから、助動詞構文による表現と文脈上等しい意味を表わしているといえる[18]。この点においても V1 と V2 の主語が一致していることが証明される。

表 1 で示したように、V2aux.が他動詞の助動詞構文は沙流方言のテキスト資料において 239 例あらわれ、いずれにおいても V1 と V2 の間で主語の名詞項が共有されている。次に、V2 が自動詞の助動詞構文について確認する。

（12） tane, φ-φ-kor kiyanne *sensey* utar **φ-arki tunas** wa,
今 3S.SG-3O.SG-持つ 年上の 先生 がた 3S.SPL-来る はやい て
turano kotan un φ-hosippa kuni φ-φ-ye akusu
一緒に 村 へ 3.S-帰る.PL ことになっている 3S.SG-3O.SG-言う と
「今、彼女の年上の先生がたが来るのが早くなって、一緒にくにへ帰るのだと彼女が言うので」

田村（1984：54）

（13） **φ-i-kik moyre** siriki hi ta peker rera ne
3S.SG-1O.SG-叩く おそい 様子が見える とき に 明るい 風 として
ni-erewkurpok an-esikiru
立木の蔭 1S.SG-身をひらりとかわす
「（カネペツの人が）私を叩くのが遅い様子が見えたときに、澄んだ風のように立木の蔭に身をひらりとかわし」

金田一（1931b：576）

（12）、（13）は V2 が自動詞から転成した助動詞構文である。V2 は自動詞であることから主語のみを要求するが、例えば（12）の V1 の自動詞 arki「来る」がとる 3 人称

18 まったく同等の意味であるとは言えないが、例えば佐藤（2008：89-90）は V1 が自動詞、V2 が他動詞の組み合わせにおいて、V2 の「動詞としての用法と助動詞としての用法の機能の違いを明白に述べることは困難」と述べるように、非常に近似した意味を表わしていると考えられる。

複数の主語 *sensey* utar「先生がた」は、V2 の自動詞 tunas「はやい」の主語と一致しているかというとそうとはいえない。(11) のように仮に V1 を名詞に転成し V2 を本動詞とした文に置き換えてみると、例えば人称標示が明示的な一人称単数で主語が一致しているとすれば*arki tunas-an（arki「来ること」、tunas「はやい」、-an 1 人称単数主格）のような形式が推測されるが、実際にはこのような形式は現れないと考えられる。なぜならば自動詞である tunas が主格の要求する名詞項を 1 人称単数主語で満たすと、その時点で形態的には閉じてしまい名詞に転成した V1 の arki「来ること」と統語的な関係を持つことができなくなるためである。そのため V2 が自動詞である場合、V1 と V2 の主語は一致せず（共有されず）、無論、V2 は目的格をとらないことから目的語で一致することもない。また、このことは沙流方言のテキスト資料からえられた V2 が自動詞の助動詞構文の用例 11 例すべてに当てはまる。以上をまとめると以下のようになる。

表 2　SVC の構成上の特徴とアイヌ語の助動詞

	V2aux.=Vt	V2aux.=Vi
A	非対称的 （V2 に立てる語は限定的であるが、否定的な様態を表わす語を中心的に広く認められる）	非対称的 （V2 は意味的にも文法的にも非常に限定的である）
B	V1 と V2 は形式上「隣接」（ただし、副助詞は間に立ちうる）	
C	V1、V2 ともに語としての文法的、音韻的な独立性を有する（ただし形式上 V2 は助動詞であり、統語的な独立性は低い）。	
D	形式上は V1 のとる標示が V2 を含む構造全体の文法範疇の標示を担っている。	
項の共有	項の共有あり	項の共有無し

B、C、D は、SVC と助動詞構文との根本的な構造の異なりから単純に SVC のパラメータをあてはめることができないが、V2 の自他の差によって B、C、D の形式的な特徴に大きな異なりはみられない。一方で、A と「項の共有」については V2 が他動詞の場合と自動詞の場合で特徴が大きく異なっている（A は類型上同じであるが、minor verb の制約が異なる）。以下ではこの点に着目し、V2aux.が自動詞から転成されるパターンと他動詞から転成されるパターンの間の意味上、統語上の差異を通言語学的な SVC の類型から位置づけていく。

5.　助動詞の自他と制約

アイヌ語の助動詞構文を構成する V1 と V2aux.がともに意味上では動詞的であることから、二つの動詞形式の連続と見立てて SVC のパラメータにそって特徴を整理してきた。以下では特に助動詞構文の構成に深くかかわる特徴である V1 と V2 の非対称性お

よび助動詞の自他によってみられる「項の共有」の構造的な差を、通言語学的な SVC の類型のなかで具体的に確認していく。Aikhenvald（2006 : 21）は非対称的な SVC について、二つの動詞が連続して一つの事象を表わすとき、意味的、文法的に制約のあるクラスとないクラスから動詞が選ばれて SVC を構成するパターンを非対称的な SVC と規定している。アイヌ語の助動詞構文における V1 と V2 の関係も V2 が意味的、文法的に限定されたクラスから選ばれることから非対称的であるといえる。また、非対称的な SVC の主要部は制約のないクラスから選ばれた動詞（major verb）が担い、制約のあるクラスから選ばれた動詞（minor verb）は主要部および構造全体に対して修飾的な意味をもつと述べられている。助動詞構文においては、V2 の自他に関わらず V1 が major verb であり主要部となる[19]。たとえば、（2）の ipe-an okere「私が食べおえる」は自動詞 ipe と他動詞 okere の組み合わせであるが、助動詞構文として意味上で複合して単一の述語構造となっても構造全体の結合価は V1 の自動詞がとる主格だけで満たされる。また（13）のように V1 が他動詞 kik、V2 が自動詞 moyre という組み合わせであっても、構造全体の結合価は V1 に従って主格と目的格を要求していることから V1 が主要部とみなせる。

以上の点から非対称的な SVC の統語的特徴はアイヌ語の助動詞構文においてもあてはまり、V2 の自他はこの時点では大きなふるまいの違いをみせない。次に非対称性の構造における V1 と V2 の意味的関係の類型においてアイヌ語の助動詞構文の位置づけを確認する。

5.1. 他動詞から転成した助動詞構文の意味的関係

他動詞から転成した助動詞を V2 にもつ助動詞構文は、上述のとおり V1 と V2 の関係が非対称的であって、かつ V1 と V2 のとる主語の項が共有されている。

Aikhenvald（2006 : 22-30）は、非対称的な SVC の構成と意味関係について minor verb のはたす機能から 8 パターンに類型化して記述している。このなかで、他動詞から転成した助動詞の構文は、以下で引用する"Secondary concept serialization"のパターンに近い特徴を示している。

> These concepts provide 'semantic modification of some other verbs, with which they are in a syntactic or a morphological construction'. Secondary-A concepts provide no addition to the semantic roles associated with the verb to which they are related. They include obligation, probability, pretend-type, begining-type (including 'begin', 'continue', 'finish'), trying-type ('try', 'attempt'), and negators. (Aikhenvald, 2006 : 23)

"Secondary concepts"というのは Dixon（2010 : 401-402）によると Primary Verb（主要部の動詞）に対して意味的な修飾をおこなう要素であり、このうち Primary verb に対して意味的な修飾をしても項を追加しない一連の概念が"Secondary-A concepts"と呼ばれる。項を追加しないという統語的な性質について、Dixon（2010 : 401）は "Both *John wrote*

19 （11）のような V1 が自動詞、V2 が他動詞の組み合わせは、V1 が名詞に転成し V2 が本動詞としてそれを目的語としてとる他動詞述語文にもなりえる。この場合は本動詞 V2 が主要部になるが、助動詞構文と他動詞述語文は表わす内容に大差がないことから意味上は主要部の認定が難しい。

a detective story and *John began to write a detective story* involve just two NP arguments, *John* and *a detective story*."という例をあげている。すなわち、primary verb である write「書く」は主語である John「ジョン」と目的語である a detective story「推理小説」の二つの名詞項をとっているが、ここに begin「始める」という動詞を加えて一種の動詞連続構文を構成しても構文全体がとる名詞項は変わらないということである。このようなことが可能な概念としては否定（Negators）、可能、義務など（Modal-type）、「始める、続ける、やめる、終わる」など（Begining-type）、「試す、企てる」など（Trying-type）が該当し、それぞれの持つ意味を primary verb に修飾的に添えて SVC を構成する（多くは補文的な構造を取る）。

アイヌ語の助動詞構文で考えると、他動詞から転成した助動詞は、意味的に easkay「できる」（Modal-type）や okere「終える」（Begining-type）そして、多くの否定的な意味を含む動詞（一種の Negators）といった Secondary-A concepts に属する形式が多く、それぞれの持つ動詞的な意味が保たれたまま V1 と意味上で複合している。また統語的にも、本動詞である V1 に名詞項を加えることなく単一の述語としてまとまることから、これらは非対称的な SVC における"Secondary concept serialization"の示す意味的、統語的な特徴と非常に一致する点が多いといえる。

5.2.　自動詞から転成した助動詞構文の意味的関係

自動詞から転成した助動詞を V2 にもつ助動詞構文は、V1 と V2 の関係が非対称的であるという点までは他動詞から転成した助動詞と同じであるが、4.1.で示したように V1 と V2 の間に「項の共有」がないという点で他動詞から転成した助動詞構文と大きく異なる。

Aikhenvald（2006 : 14）は SVC の類型的観点から項の共有が見られないパターンについて、主語ではない項を共有したり全く何の項も共有しない SVC は通言語学的にみて稀であり個別言語においては幾分周辺的であると指摘し、主語の共有がある SVC のパターンとは分けて記述している。このうち "Event-argument SVCs"というパターンは、項の共有がなく、一方は自動詞でもう一方は他動詞か自動詞という構成素の組み合わせであり、構成素の順序も修飾する動詞が先行もしくは後続し、構成素の関係は非対称的であるという統語的な特徴で類型化された構造であり、アイヌ語における自動詞から転成した助動詞構文の統語的特徴はこれと一致する。

"Event-argument SVCs"は事象や状態が、様態（manner）や時間的な順序（temporal order）、位置の特定化（locational specification）といった全体的な状況によって表示されるという意味的な構造を有すると述べている（Aikhenvald, 2006 : 18）。すなわち、V1 が表わす事象全体を V2 が項として取っている構造である。

Refsing（1986 : 200）は静内方言に見られる助動詞 tunas と moyre について用例を上げながら"The auxiliaries *moyre* and *tunas* serve respectively to characterize a process as either slow or quick."と機能を記述しており、(8)、(12) で示した沙流方言の助動詞 moyre「おそい」、tunas「はやい」の機能もこれに相違しない。これらは本動詞が表わす事象に対して早い、遅いといったプロセスの特徴づけをする機能であり、"Event-argument SVCs"における「事象の様態（manner）」ないし「時間的な状態（temporal order）」の概念に当

てはまると考えられる[20]。

また、自動詞から転成した助動詞構文は他動詞から転成した助動詞構文に比べて形式の数が非常に限られている点も先に引用した Aikhenvald（2006：14）の"rather peripheral in individual languages."という指摘に合致する傾向である。

5.3.　SVC 類型におけるアイヌ語の助動詞構文

以上のとおり、アイヌ語の助動詞構文を SVC における意味的関係の類型に当てはめると、意味上の複合において V2aux.が他動詞の場合は"Secondary concept serialization"、自動詞の場合は"Event-argument SVCs"という異なる構造に分類しうることがわかった。

特に V2aux.が自動詞の場合に V1 の項と共有がみられないという特徴は、通言語学的にも稀なパターンに属することから、アイヌ語の助動詞構文において自動詞からの転成には強い制約があるという仮説を支持するといえる（もちろん助動詞構文は非対称的なので、動詞から V2aux.への転成上の制約は自他ともに存在するが、他動詞からの転成に比べて自動詞からの転成が極端に少ない理由はこの類型的な傾向に従うものと考えられる）。次に、このような制約のなかで tunas「はやい」と moyre「おそい」の形式が助動詞として転成を許容される理由について検討する。

6.　自動詞から転成される助動詞の特徴と制約

前節までに、Aikhenvald（2006）の指摘する項の共有がない非対称の SVC（通言語学的に非常に稀であり制約が強い構造）である"Event-argument SVCs"と、アイヌ語の V2aux.が自動詞から転成された助動詞構文が意味的、統語的に特徴を共有していることから、アイヌ語においても自動詞から助動詞へ転成するうえで強い制約が生じうるという演繹的な考察を示した。

以下では、制約下で自動詞から転成が許容される形式について考察をおこなう。

6.1.　助動詞転成が許容される自動詞の特徴

"Event-argument SVCs"における major verb（V1）と minor verb（V2）の意味的な関係は、5.2.で要約したとおり V1 の表わす事象や状態に対して V2 が様態（manner）や時間的な順序（temporal order）、位置の特定化（locational specification）を表示するというものである。アイヌ語の自動詞から転成した助動詞としてあげられる tunas「はやい」と moyre「おそい」は、いずれも V1 に対して様態を示していると考えられ、"Event-argument SVCs"の意味的関係の特徴に反しない。

---

[20] Solnit（2006：154）は"Event-argument SVCs"の意味的、統語的特徴を満たす Eastern Kayah Li 語の例として以下の例をあげている。

ʔa　[ʔe　phrɛ̄]　dī
3　eat　fast　cooked rice
'He eats quickly'

これは「食べる（eat）」という事象に対してそのプロセスの時間的な状態を表示する「はやい（fast）」が動詞連続構造として意味的に複合している例であり、アイヌ語の助動詞構文における tunas「はやい」のふるまいと非常に近い構文である。

Aikhenvald（2006：19）はさらに、"Event-argument SVCs"における構成素の意味的特徴として、意味的に event-argument SVCs は様態副詞の構造と類似していると指摘している。アイヌ語の自動詞 tunas「はやい」と moyre「おそい」も、V1 と項を共有せずに事象全体にかかってその様態を表示するという点で非常に副詞と類似した意味機能を示しているといえる。比較のために（12）で示した例文を（14）として以下に再掲する。

（14）　tane,　ϕ-ϕ-kor　　kiyanne *sensey*　utar　**ϕ-arki　　tunas**　wa,
今　3S.SG-3O.SG-持つ　年上の　先生　がた　3S.SPL-来る　はやい　て
turano kotan un　ϕ-hosippa　　kuni　　ϕ-ϕ-ye　　akusu
一緒に 村　へ　3.S-帰る.PL ことになっている　3S.SG-3O.SG-言う　と
「今、彼女の年上の先生がたが来るのが早くなって、一緒にくにへ帰るのだと彼女が言うので」

田村（1984：54）

（14）は V1 の arki「来る」に対して V2aux.の tunas「はやい」が助動詞としてふるまっているが、これを仮に副詞を用いて表わすと以下のようになると考えられる（筆者による作例）。

（15）　ϕ-ϕ-kor　　kiyanne　*sensey*　utar　**tunas(-no)　　ϕ-arki**　wa,
3S.SG-3O.SG-持つ　年上の　先生　　がた　はやく　　3S.SPL-来る　て
「彼女の年上の先生がたが早く来て」

tunas「はやい」の後ろにある-no は副詞化の接尾辞であるが、沙流方言のテキストでは-no がなくても副詞としてふるまっている用例がみられるため括弧でくくった[21]。（15）のように「はやく彼らが来て」と表現しても、（14）とは文脈上大きな差はないように思われる（ただし、完全に同じ意味を表わしているとは言えない）。

しかし、副詞的表現との意味的な類似という特徴は tunas「はやい」、moyre「おそい」が自動詞から助動詞への転成を許容されるうえでの特質ではない[22]。副詞的な意味を持つ（すなわち形容詞的な）自動詞が助動詞に転成可能だとすると、tunas「はやい」、moyre「おそい」に限らずより多くの様態を表わす形式が許容されることになる。tunas「はやい」と moyre「おそい」以外には、次節で述べるが ruy「激しい」も自動詞の助動詞用法をもつとみられるが、これら以外には沙流方言の記述において管見の及ぶ限り確認されないことから tunas「はやい」、moyre「おそい」に共通する様態（ruy「激しい」の表わす様態とは少し異なるように思われるが、これとの共通性も視野に入れて）がもつ意味上の性質が自動詞から助動詞への転成の許容に関わっていると考えるほうがよい。

---

[21] 基本的に自動詞がそのまま副詞として動詞を修飾することはできず、接尾辞をとって副詞化する必要があるが、本稿で分析した沙流方言のテキストにおいては、tunas「はやい」、moyre「おそい」のいずれも、散文、韻文において接尾辞をとらずにそのまま副詞としてふるまっている例がみられた。このような特異なふるまいについても今後、検討する必要がある。

[22] 佐藤知己先生より、副詞的表現との意味的な類似という基準では tunas「はやい」、moyre「おそい」に限らずより多くの自動詞が助動詞構文を形成する可能性が出てくるが実際には例が見られないことから、特に tunas、moyre が許容される理由について検討する必要があるとのご指摘いただいた。

また、次のような複合現象も助動詞への転成可能性の基準となる。

（16） sine cup akkari, a-komoyremoyre ruwe ne.
一 月 以上 1S.SG-〜にひどく遅れる こと だ
hosipimoyre-an ruwe ne.
帰り遅れる-1SG.SG こと だ
「ひと月以上、私はひどく遅れたのだ。私は帰るのが遅くなったのだ」
田村（1989：64）

（16）では自動詞 hosipi「帰る」と自動詞 moyre「遅れる（おそい）」が複合して hosipi-moyre「帰り遅れる、帰りが遅くなる」という自動詞になっている。田村（1973）は合成動詞の前部要素と後部要素の間の統語的な関係性に着目して分類し、アイヌ語の合成動詞のうち自立した二つの動詞が複合するパターンは自動詞と自動詞が複合して自動詞になるパターンと、自動詞と他動詞が複合して他動詞になるパターンの 2 種のみであることを指摘している。このうち、自動詞と自動詞の複合について田村（1973：75-76）はこれを、意味的に自動詞と助動詞が複合して自動詞を形成するパターンとして記述しており「前部要素は自動詞, 後部要素は不定で, 二要素が本動詞・助動詞の関係になっているもの」として「ipé-ruy 大食いだ < ipé 食べる、rúy 激しい」のような例をあげている。hosipi-moyre の意味関係はこれに相当すると考えられ、動詞の複合パターンからも moyre「おそい」の助動詞としてのふるまいを認めることができる。ただし、分析した沙流方言テキストのなかに現れる moyre「おそい」、tunas「はやい」のうち、このような複合例は（16）の hosipi-moyre のみであり、非常に稀な現象であると考えられる。

6.2. その他の自動詞から転成した助動詞

2.2.で示したとおり、先行研究において自動詞から転成した助動詞としての tunas「はやい」、moyre「おそい」の記述は散見されるが、その他の自動詞の助動詞への転成例は田村（1996：595）に ruy「激しい」がみられるのみである。前節 6.1.で述べたように、moyre「おそい」（と tunas「はやい」）は意味的に大きく変化することなく統語的、形態的に独立した自動詞、助動詞、複合動詞の後部要素として現れる。たとえば、同じく様態を表わす自動詞である pirka「良い、良くなる」は、独立した自動詞としては頻繁に現れるが、助動詞や複合動詞の後部要素として現れる例はいまのところ得られない。一方で、田村（1973）から先ほど引用した複合動詞の助動詞的な後部要素 ruy は、独立した自動詞としても、複合語の後部要素としても例が得られ、また助動詞の用法も沙流方言のテキストから以下の例が得られた。

（17） suy eytasa **ku-ϕ-ye ruy** wa k-ϕ-eaykap yak wen
また あんまり 1S.SG-3O-言う 激しい て 1S.SG-3O-できない なら 悪い
「またあんまり私が言い過ぎて、言えなくなるといけない」
田村（1984：48）

（18）orano　paye-an　　a　paye-an　　a　ayne **paye-an　ruy**
それから 行く-1S.PL 反復 行く-1S.PL 反復　挙句 行く-1S.PL 激しい
「それから私たちは（沖へ）行きに行ったあげく行き過ぎた（と思うほど陸を離れた）」

萱野（2005：149）

（17）は V1 の ye「言う」が他動詞であることから複合動詞ではなく助動詞構文である[23]。（18）は V1 の paye「行く」が自動詞であるが、人称接辞が V1 にのみ付いていることから複合動詞ではなく ruy「激しい」の助動詞用法である。このことから、ruy「激しい」は tunas「はやい」および moyre「おそい」と同様に助動詞に転成できる自動詞の例とみなすことができそうである。

現時点では自動詞の tunas「はやい」、moyre「おそい」、ruy「激しい」が助動詞への転成を許容される理由について自動詞の体系から説明付けるに至っておらず、今後の大きな課題である。

7. まとめ

本稿ではアイヌ語沙流方言の複雑述語である助動詞構文のうち、V2 が動詞としての意味を保ったまま助動詞に転成している構文を対象にし、V1 と V2 を動詞の連続に見立てたうえで動詞連続構造（SVC）の概念および類型のなかで扱った。特に、動詞から助動詞への転成において他動詞に比べて自動詞の形式が非常に限られていることから、V2aux.の自他において制約に関わる構造の異なりがあると仮定し、SVC を構成するパラメータに基づいて助動詞構文の統語的、意味的な特徴を示した。その結果、項の共有という点において他動詞と自動詞で異なりがみられ、項の共有がみられない自動詞の形式は通言語学的な SVC の類型からしても V1 と V2 の意味的な複合において非常に制約的（このパターンで SVC を構成すること自体が稀）であることから、演繹的に V2aux.における他動詞と自動詞の転成の差が生じていると述べた。ただし、項の共有がない場合になぜ制約が強まるのかという点については本稿での議論は不十分であり、アイヌ語の体系のなかから積極的な理由付けを示せるよう検討を続ける。

また、制約が強い自動詞からの転成においてなぜ tunas「はやい」、moyre「おそい」は許容されるのかという点について SVC の類似した構造から説明付けを試みた。他の様態を表わす自動詞が転成上の制約をうける積極的な理由を示すことができず今後の課題となったが、moyre「おそい」および ruy「激しい」（これも自動詞の助動詞用法を有する）が二つの動詞の形態的複合において後部要素として立ち得る点で他の自動詞と異なるふるまいをみせることから、助動詞への転成制約と関連する現象として用例のさらなる追加とともに検討を続ける。

---

23 小林（2015）は V-V 型の一項動詞の形成について、前部要素と後部要素がそれぞれ名詞化し合成名詞となり、さらに後部要素の動名詞の性質から動詞化することによって合成動詞の形式が生じることを例証的に論じている。動詞が名詞に転成するためには自動詞である必要があり、他動詞はそのまま名詞に転成できない。このことからも（17）は合成動詞ではないことがわかる。

略号一覧

1/2/3	1st/2nd/3rd person	S	subjective
ϕ	3rd-persona affix (zero-morpheme)	SG	singular
aux.	auxiliary (verb)	SVC	serial verb construction
O	objective	Vi	intransitive verb
PL	plural	Vt	transitive verb

謝辞

本稿の執筆にあたっては、指導教員である佐藤知己先生から懇切なご指導を賜った。また査読者の先生方からも大変重要なご教示やご指摘を数多く頂いた。さらに、北海道大学の高橋靖以先生、国立国語研究所のブガエワアンナ先生からも貴重なご教示、ご指摘を頂いた。ここに記して、深く感謝申し上げる。当然ながら、本稿における全ての誤りは筆者に帰するものである。

参照文献

奥田統己
1999 『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集（CD-ROM つき）』札幌学院大学.
萱野茂
1998a 『萱野茂のアイヌ神話集成：カムイユカラ編 II』2：平凡社.
1998b 『萱野茂のアイヌ神話集成：ウウェペケレ編 I』4：平凡社.
1998c 『萱野茂のアイヌ神話集成 ウウェペケレ編 II』5：平凡社.
2005 『新訂復刻 ウウェペケレ集大成』日本伝統文化振興財団.
金田一京助
1931a 「アイヌユーカラ語法摘要」金田一京助（編）『アイヌ敍事詩ユーカラの研究』1-233, 東洋文庫
1931b 「アイヌユーカラ虎杖丸の曲」金田一京助（編）『アイヌ敍事詩ユーカラの研究』239-608, 東洋文庫.
久保寺逸彦
1977 『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店.
小林美紀
2015 「アイヌ語における V-V 型の一項動詞」アンナ・ブガエワ、長崎郁（編）『アイヌ語研究の諸問題』37-47, 北海道出版企画センター.
佐藤知己
2008 『アイヌ語文法の基礎』大学書林.
田村（福田）すず子
1960 「アイヌ語沙流方言の助動詞：アイヌ語の助詞についての報告その 1」『民族學研究』24(4)：67-78.
田村すず子
1973 「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」『アジア・アフリカ文法研究』2：73-94.

1984 『アイヌ語音声資料』1：早稲田大学語学教育研究所.
1985 『アイヌ語音声資料』2：早稲田大学語学教育研究所.
1987 『アイヌ語音声資料』4：早稲田大学語学教育研究所.
1989 『アイヌ語音声資料』6：早稲田大学語学教育研究所.
1996 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館.

知里真志保

1942 「アイヌ語法研究－樺太方言を中心として－」『樺太廳博物館報告』4(4)：51-172.
1953 「アイヌ語の助詞」金田一博士古稀記念論文集刊行会（編）『言語民俗論叢：金田一博士古稀記念』913-932. 三省堂.

中川裕

1995 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.
2013 「アイヌ語における動詞連続」 日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究プロジェクトアイヌ語班平成 25 年度第一回研究発表会発表（配布資料）. 国立国語研究所. 2013 年 7 月 6 日.

服部四郎

1964 『アイヌ語方言辞典』岩波書店.

松本曜

1998 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114：37-82.

Aikhenvald, Alexandra.Y.

2006 Serial Verb Constructions in Typological Perspective, In: Aikhenvald, A.Y.& Dixson R.M.W. (eds.), *Serial Verb Constructions A Cross-linguistic Typology*: 1-68. Oxford University Press.

Dixon, Robert M. W.

2010 *Basic linguistic theory*, 2：Oxford University Press.

Refsing, Kirsten

1986 *The Ainu language : the morphology and syntax of the Shizunai dialect*. Aarhus University Press.

Solnit, David B.

2006 Verb serialisation in Eastern Kayah Li, In: Aikhenvald, A.Y. & Dixson R.M.W. (eds.), *Serial Verb Constructions A Cross-linguistic Typology*: 144-159. Oxford University Press.

Constraints on the Use of Verbs as Auxiliary Verbs in the Saru Dialect of Ainu

Yoshihisa KISHIMOTO
Graduate School of letters, Hokkaido University

This paper explores auxiliary verb constructions in the Saru dialect of Ainu from the vantage point of the theory of serial verb construction (SVC) and its types. When converting from a verb to an auxiliary verb, intransitive verb types are far more limited than transitive verbs, so I hypothesized that there are structural differences involved in the way auxiliary verbs are constrained by intransitive or transitive verbs. In addition, the cross-linguistic patterns of SVC were used to identify the syntactic and semantic features of auxiliary verb constructions. The findings showed differences in transitive and intransitive verbs in argument sharing; because intransitive auxiliary verb structure does not exhibit argument sharing, I believe it is subject to major restrictions in V1 and V2 semantic complexity. In addition, with regard to why, in conversions from intransitive verbs, which have greater constraints, *tunas* (fast, early) and *moyre* (to be slow, late) are permissible conversions, I attempted to render an explanation based on a similar structure found in SVC.